

お化けとまちがえた話

小川未明

青空文庫

ある田舎に、二郎という子供がありました。よく隣の家へ遊びにゆきました。

その家には、二郎といっしょになつて、遊ぶような子供はなかつたけれど、女房は、二郎をかわいがつてくれました。

「おばさん、あの赤かきの葉をとつておくれよ。」と、二郎は、裏にあつたかきの葉をさしていうと、女房は、仕事をしながら、

「いま、これが終えたら、取つてあげますよ。」

と答えて、仕事がすむと、さおを持つてきて、二郎のほしいというかきの葉を取つてくれたこともあります。

「おばさん、つるを折つておくれよ。」と、二郎は頼むと、女房は、

「はい、はい、いまこれがすむと折つてあげますから待つておいでなさいね。」といひました。

二郎は、女房の仕事をしているそばで、おとなしく遊んでいました。そして、おりおり、その方を見ては、

「おばさん、まだかい。」と、催促をしたのであります。

女房の家は、貧しかったのであります。主人は、行商をして、晩方、暗くならなければ帰ってこなかったのです。せがれは、旅へ奉公にやられて、女房は、主人の留守も家でいろいろな仕事をしたり、手内職に封筒を貼ったりしていたのでした。

「おまえは、よくお隣へゆくが、おかみさんの仕事の邪魔をしてはいけないよ。」と、おばあさんは、二郎にいい聞かせたのです。

しかし、二郎は、隣へ遊びにゆきました。ゆけば、人のよい女房は、

「二郎ちゃん、遊びにきたのかね。」と行って、心持ちよく迎えてくれました。そして、二郎が遊びに飽きて帰ろうとすると、

「転ばんように、お帰り。また、遊びにきなさいね。」と、いつてくれたのであります。

秋も老けて、末になると、いつしかかきの木は坊主になつてしまつて、寒い木枯らしが、昼も夜も吹きさらしました。そして、日は短くなつて、昼になつたかと思つと、じきに晩となり暗くなつたのでした。

からすが、悲しそうに鳴いて、村の中はさびしげに見え、とうとう雪の降る冬になつてしまいました。

雪が降って、地の上に積ると、二郎は、外へ出て遊ぶことができないから、いままでよりも、もつとたびたび、隣の家へ遊びに行くようになりました。

女房は、明るい、障子窓の下へ、箱を置いて、それを台にして、上で封筒を貼っていました。日が当たると、屋根の雪が解けて、ポトリポトリと音をたて、障子に黒い影をうつして落ちるのでした。二郎は、げたについた雪を、入り口の柱でたたいて、落としてから、

「おばさん……。」「といて、入ってきました。

二郎のおばあさんは、あまり、たびたび二郎が、隣へ行って邪魔をするので、

「二郎や、いくら、お隣のおかみさんは、いい人でも、そう毎日いっては、しまいにきてくれるなどいうから、あまりゆくのじやない。」といました。

「おばあさん、おかみさんは、いやな顔なんかしないよ。」と、二郎は答えました。

「それは、いけば、いやな顔なんかしないけれど、心の内では、毎日、仕事の邪魔をしてうるさい子だと思っていなさるだろう……。」「と、おばあさんはいいました。

ちようど、その明るる日のことです。二郎は静かに足音のしないように、隣の家入り口からはいってゆきました。

「おかみさんは、どんな顔かおをしているだろう？」と、二郎じろうは、思おもったからです。

二郎じろうは、玄関げんかんの障子しょうじの穴あなから、おかみさんの仕事しごとをしている方ほうをながめました。そして、びつくりしました。それは、いつものやさしい女にようぼう房ぼうでなく、怖おそろしい、三つ目みつめの化けばけものが、箱はこの前まえにすわって仕事しごとをしていたからです。

二郎じろうは、家うちへ走り帰かえってこたつの中なかへめぐり込こんで、小ちいさくなっていました。

「二郎じろうや、どうかしたか？ おかみさんにしかられでもしたのだろう……。」と、おばあさんは、笑わらいながらいわれました。

二郎じろうは、不思議ふしぎなことがあるものだと思おもった。

「おばあさん、隣となりのおかみさんは、三つ目みつめのお化けばけにばけていたよ。」といいました。

「おまえは、なにをいう？」と、おばあさんは、やはりこたつに当あたりながら、笑わらっていました。

「おばあさん、うそでない、ほんとうだから。」と、二郎じろうは、こういいながら、なおも怖おそろしがってふとんを頭あたまからかぶっていました。

「おまえが見みたのなら、お化けばけかもしれない。」

「そんなら、隣となりのおかみさんは、お化けばけ？」

「なんともいえない。」と、おばあさんは、笑いました。

「どうして、隣のおかみさんは、お化けなの？」と、二郎はおばあさんに、しつこくたずねました。

「おまえが見たというからさ。あまりたびたびゆくと、お化けに食べられるから、もうゆかないほうがいい。」と、おばあさんはいわれました。

二郎は、翌日から、隣へ遊びにいかなくなりました。そして、家にばかりいて、おばあさんを相手にいろいろなことをねだったり、わがままをいいました。おばあさんは、困って、

「二郎や、すこし、お隣へでもいって遊んでこい。このごろは、ちつとも隣へいかないのう。」といわれました。

おばあさんがいけといわれても、二郎は、どうしてもゆく気になりませんでした。そして、いつか三つ目の化けものが、箱の前にすわって仕事をしていたことを思い出すと、ぞつと身の毛がよだつたのでした。

いままで、毎日のように、二郎が遊びにきたのに急にこなくなつたので、隣の女房はどうしたのだらうと思いました。それで、ある日、二郎の家へきたときに、おばあ

さんにそのことをたずねました。おばあさんは、いつか、二郎が、いったとき、おかみさんでなく、三つ目の化けものが、仕事をしていたと行って、それから、いかないようだと答えたのです。

すると、隣のおかみさんは、声をたてて笑いました。

「町へいったとき、二郎ちゃんに上げようと思って買ってきた面を、もう遊びにきなさるころだと思つてかぶつて仕事をしていたのを、二郎ちゃんが見て、びっくりなさつたのですよ。」と、おかみさんはいいました。

この話で、みんなが大笑いをしました。やがて、春になりました。子供は外へ出て遊ぶようになり、二郎は、その年から学校へ行くことになりました。そして、しぜん、隣の家へもいままでのように、たびたびゆかなくなつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「お化《ぼ》けとまちがえた話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お化けとまちがえた話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>